

高等教育グローバルセンターの英語教育

副題：The ALL ROOMs・イングリッシュマラソン・ リメディアル教育

高等教育グローバルセンター

濱田 陽・長岡 光夫

The English education in Global center for higher education

Yo HAMADA, Mitsuo NAGAOKA

Global Center for Higher Education

概要：旧教育推進総合センターと旧国際交流センターを統合して今年度から設立された高等教育グローバルセンターでは、今年度、全学英語教育の促進として、3本柱を掲げた。本稿では、英語自律学習促進施設として運営している10年目を迎えたThe ALL ROOMsと学生の英語力向上プログラムとして3年目を迎えたイングリッシュマラソンの仕組みと活動実績を報告する。さらに、今年度から開始した、英語教育リメディアルプログラムの内容と実態についても報告をする。そのうえで、今後の検討課題を整理し、この先の展望についても議論したい。

1. はじめに

秋田大学では、今年度、教育推進総合センターと国際交流センターを統合し、高等教育グローバルセンターを新設した。旧教育推進総合センターでは、10年前から、独自のself-access centerである語学学習施設The ALL ROOMsを運営している(濱田, 2013; 2016; Grafström, 2014; 2015)。まず初めに、現在のThe ALL ROOMsの状況と課題を報告する。次に、3年前から英語課外プログラムとして運営しているイングリッシュマラソンについて報告する。イングリッシュマラソンでは、年々プログラム内容を改善し、常に学生の実態に合った効果的なプログラム内容を検討している。本稿では、今年度の結果・現在の状況・課題を報告する。そして、今年度から、英語力の底上げを目指し立ち上げた英語教育リメディアルプログラムについて報告する。初年度実施してみたの、学生の状況・今後の課題を整理する。最終的に、3つの主要な取り組みを総括して、今後の課題と展望について論じたい。

2. The ALL ROOMs

2-1. The ALL ROOMsの概要

The ALL ROOMs (The Autonomous Language Learning ROOMs)は、現在多くの大学に併設されているself-access centerの一種である。秋田大学の学生支援棟二階にあり、公用語は英語のみで、入ってすぐのEnglishラウンジと、個別学習を行うことができる3つの個室から構成される。秋田大学のThe ALL ROOMsの特徴は、学生が学生のために運営する形である。通常、他大学では、アドバイザーとして教員を配置しており、学生が学生を支援するモデルは、国内でも少ない。運営する学生スタッフは、留学生3名と日本人数名の計10名程度の学生である。このスタッフチームを高等教育グローバルセンター所属の教員が統率する形をとっている。

学生スタッフは、シフトを組んで、メインのEnglishラウンジで、訪れた学生のサポートをする。主な業務は、英会話であるが、担当の学生によって「守備範囲」が異なるため、就職活動の話、

文化の話、留学の話など、多岐にわたる。

著者の、自律学習に関連する学会・発表等の調査から、The ALL ROOMs は、優れた学生スタッフの育成と、その学生が他の学生をサポートするという仕組みで運営する、先駆的な成功例であると認識している。

The ALL ROOMs の学生スタッフの英語力は極めて高く、卒業までに TOEIC で 900 点を超える者が多い。しかし、入学時の学生スタッフの英語力は決して高くない。圧倒的な英語力を備えた上級生学生スタッフと協働するという厳しい環境の中で、必死に英語力を向上させていくのである。さらに、TOEIC の高得点は、決して目標ではなく、彼らにとっては通過点に過ぎない。つまり、個々の学術的専門性・豊かな人間性を備えた上で、英語力を身につけているべきなのであり、TOEIC はあくまでその英語力の一部を示すものにすぎないという捉え方をしている。その結果、今年度卒業生の就職先は、五大商社、秋田県教員、有名企業となっている。

3. English Marathon

3-1. English Marathon の概要

イングリッシュマラソンでは、参加者は、一年間、日常的に英語に課外学習として触れることを通して、英語力を総合的に伸ばす（濱田・ベセツト・グラフィストロム・タッカー、2018）。30 名～40 名の参加者が各班に分かれ、The ALL ROOMs スタッフの協力・教員の指導のもと、様々な活動を通して、完走を目指す。9 月には、シンガポールの RELC への 2 週間短期留学をする。帰国後の 10 月に第一回 TOEIC 講座を受講し、その後毎週課題をチェック、そして 11 月に再度第二回 TOEIC 講座を受講し、TOEIC を受験し成果を確認する。

3-2. 今年度の特徴

今年度は、例年よりも多くの参加となり、合計 38 名が完走した。そして、今年度から、各グループに、The ALL ROOMs の学生をメンターとして配属した。さらに、昨年度までは夏季の研修先がマレーシアだったが、今年度からシンガポールに変更した。また、昨年までは、後期に重要となる TOEIC の単語帳の習得を、夏休みの課題として

課していたが、今年度は、前期から課し、夏休み前の単語テストを通過できない者は、そこでリタイア、つまりシンガポール研修の参加も出来ない事として開始したため、早い時期から TOEIC に必要な単語を時間をかけて身につけることができた。

完走者の内訳は、国際資源学部から 18 名、教育文化学部から 12 名、医学部保健学科と理工学部からそれぞれ 4 名であった。

3-3. シンガポール研修

今年度からシンガポールの Regional Language Centre (RELC) に変更した。RELC は、語学学校の運営だけでなく、国際誌の発行等も行うアジアにおいても有名な機関である。宿泊施設も併設されており、閑静な場所に位置する、学習環境としては理想的なところである。

参加者は、2 グループに分かれ、前半 9 名が 9 月上旬、後半 29 名が 9 月中旬からの 2 週間研修を行った。前半のグループは 9 名を 1 グループで、後半は 29 名をさらに 2 グループに分けて毎日の語学研修を受けた。

研修内容は、コミュニケーションを主体とする内容で、プレゼンテーションが多かったが、単なる語学の習得の範囲だけでなく、文化体験やシンガポールの歴史を学ぶ機会もあった。文化体験では、異文化の衣装をまもって皆で記念撮影をしたり、街を探検しながら実際に異文化に触れたりすることもできた。

参加者も、語学だけでなくシンガポールの歴史や文化についても学ぶことができたという感想を持ったようで、言語と文化の結びつきを肌で感じることができたのは、言語の捉え方の観点からも望ましい。また、「自分のつたない英語でも街で意思疎通をすることができた」「初めての海外だったが、なんとか頑張ることができた」など、日本では得られない経験をしてきたことが見られた。

3-4. 今年度の結果

過年度と比較すると、今年度の特徴は、事前の得点で 500 点台の参加者の割合が高い事である。最終的な平均は、561 点から 640 点となり、79 点の伸びとなった。過去二年間は、537 点から 661 点へ、549 点から 646 点であったことから、秋

田大学のイングリッシュマラソンでは、TOEICの点数が650点程度まで向上すると言えるであろう。さらに、事前の点数が低めの参加者の伸びが著しいことから、仮に英語力が高くなくても、真剣にイングリッシュマラソンに参加することで、一気に英語力が身につくとも言えるであろう。そして、毎年必ず800点を超える高得点者も育つ事から、英語力が高い参加者にとっても、さらに向上させることができると言える。

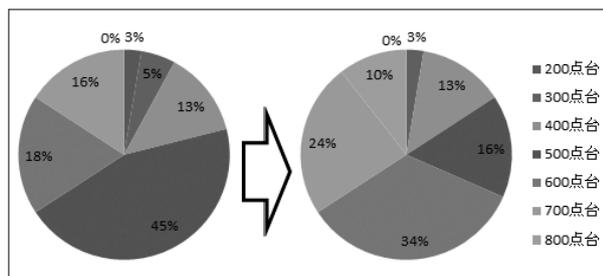


図1. 参加者のマラソン前後の TOEIC 成績

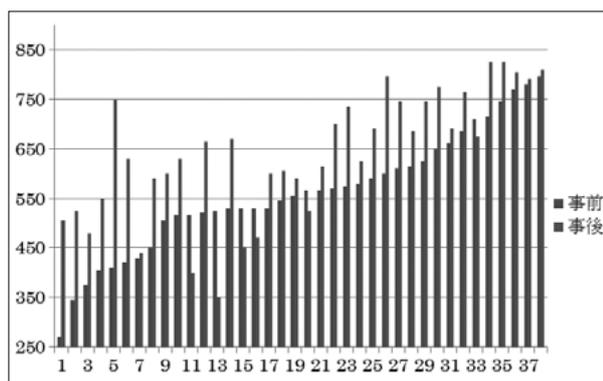


図2. 参加者の TOEIC 結果

イングリッシュマラソンでは、敢えて日本の「班」の仕組みを用いて班単位での学習を推奨しているが、マラソン終了後の参加者の感想でも、「班員の英語力と自分の英語力を比較し、今の自分の位置づけが分かった」「周りに刺激され、自分をもっと努力しなければならないと思った」などという感想が見られた。

TOEICで全ての英語力を示すことは出来ないが、英語力の一部を示す指標として用いる事はできる。また、就職活動の際にも依然として有利に働くことから、今年度の参加者も、イングリッシュマラソンが終了して英語学習も終了ではなく、ある意味新しいスタートとしてこの先も続けていくて欲しい。

3-5. 今後の課題

今後の課題を2点示す。まず、中間層の伸びが期待よりも小さいことである。500点～600点の参加者が、マラソン終了後には700点近くまたは超えることが望ましい。そのためには、一人一人の意識改革が必要だと感じている。参加者には、開始時点で、冬までに英語力を向上させるという程度の覚悟を持って、それを持ち続けて完走してほしい。そのために、来年度は、仕組みを少し改善して、全員の英語力が向上するように運営側も努力したい。

次の課題は、イングリッシュマラソンをどのようにして他の活動と結びつけるべきかという点である。イングリッシュマラソンで、ある程度の結果を出すことは、事業としての初期段階では必要な事である。しかし、この先、真に学生のためとなる高等教育グローバルセンターの中心活動とするためには、前述の The ALL ROOMS, 留学生教育と有機的に結びつける必要がある。イングリッシュマラソン, The ALL ROOMS を中心として、各学部の志の高い学生が集まり、留学生の英語教育も行う中で、学生同士が互いに高め合えるような環境を作っていきたい。

4. 英語リメディアル教育

4-1. 目的と概要

英語力の底上げを目的とし、大学英語 I の単位習得水準に届かなかった学生 24 名を対象にし、8月19日(月)～23日(金)の5日間、一日当たり90分の授業を3回実施した。テキストはケンブリッジ大学出版の BASIC GRAMMAR IN USE (Murphy, 2017) を使用し、基礎的文法事項の復習とコミュニケーション活動を行った。同じ内容の事前・事後テストを実施し、学生の学習状況を評価することにした。

4-2. プログラム内容

プログラム内容は、第一著者と第二著者が、前年度からの数回の協議を基に作成し、実際の夏季の授業は、第二著者が担当した。第二著者は、元秋田県の高専校長・指導主事・教諭の経歴があり、高校教育を熟知する「スペシャリスト」である。前期の大学英語 I (英語必修科目) も担当し、本学の英語教育の現状も把握し、かつ高校の英語

教育を分析した上で、指導した。

基礎的文法事項の内容として、現在完了、受動態、助動詞、基本動詞、形容詞と副詞、語順、接続詞と節、関係代名詞、前置詞を設定し、各項目において「文法・語法の確認、練習問題解法、コミュニケーション活動」という一連の活動を繰り返した。

4-3. 学生の状況

24名中19名の学生が意欲的に出席し、自らの弱点分野を意識しながら、基礎力アップの必要性を感じながら、意欲的に学習活動に取り組んだ。文法・語法をしっかりと理解できれば、練習問題にもコミュニケーション活動にも取り組むことができるという実感を持ちながら活動していた。少人数という環境もあり、学生は気兼ねなく質問や活動をすることができたと思われる。

4-4. 成果

事前・事後に、各分野から100問を出題し、100満点でテストを実施した。問題内容は全く同じであるが、学生には知らせずに、また、事前テストを返却し解説することもしなかった。事前テストの平均点は46.8点で、事後テストの平均点は58.8で、12.1ポイント(25.8%)の改善が見られた。(1名の学生を除き改善)改善した学生の得点の伸びは7点から24点の間に分布していた。分野別の正答率は以下ようになった。

表1. 事前テスト事後テスト結果

分野	事前テスト	事後テスト
現在完了	50.0%	71.1%
受動態	43.9%	71.9%
助動詞	66.3%	71.6%
基本動詞	57.9%	65.4%
形容詞・副詞	54.3%	73.0%
語順	69.7%	84.2%
接続詞・節	46.8%	65.5%
関係代名詞	7.0%	33.3%
前置詞	41.4%	48.3%

分野別では、現在完了に関する4問の平均点は事前テストが2.0点で、事後テストが2.84点であった。(正答率では50%が71.0%になった。)基本

動詞の分野では7問中4.05点から4.58点になった。(正答率では57.9%が65.4%になった。)形容詞・副詞の分野では、16問中の正解率が54.3%から73.0%になった。前置詞の分野は、49問中の得点は20.3点から23.7点に伸びた。(正答率は41.4%が48.3%になった。)関係代名詞では2文を1文にする問題を出題したが、習熟の度合いが一番低かった。

また、授業後のアンケートでは次のような結果になった。(対象者19名)

表2. 授業後アンケート結果

①英語が好きですか？			
好き	まあまあ好き	あまり好きでない	好きでない
1	3	10	5

②本講座が英語学習に役立ったと思いますか？					
非常に思う	思う	やや思う	あまり思わない	思わない	全く思わない
6	10	2	4	0	0

③上記を選択した理由について詳しく教えてください。(抜粋)

- ・文法について詳しく教えてもらい理解できた。
- ・高校で習った範囲で忘れていた所をもう一度復習できた。
- ・なんとなく解いていた問題を確信をもって答えることができた。
- ・一分野毎丁寧に説明されたため分かりやすかった。
- ・基礎が定着したから。
- ・基礎を分かりやすく学べて良かった。
- ・今まであやふやだった have などの使い方や単語の位置について知ることができた。
- ・一つ一つなぜそうなのかを理解できた。

④本講座で学んだこと・身につけた事等、自分のためになったことを書いてください。(抜粋)

- ・英語の基礎をできたことがとても良かった。
- ・英語への関心が高まった。
- ・現在完了と関係代名詞はそれなりにできるようになったと思う。
- ・5日間無欠席で受講したことで、意識の面で改善も行うことができたと思う。

- ・英文法の基礎が身に付き、意味を理解できるようになった。
- ・英語の文法表現と発音をしっかり学んだと思う。
- ・enough の位置、接続詞の使い方を知ることができた。
- ・全て英語で書かれているテキストだったので、自分で単語を調べることが増えた。
- ・英語に対して前向きになれた気がする。

4-5. 今後の課題

基礎力が不足している学生がある程度の割合にいることは事実なので、大学英語 I における指導でも、そのような学生に対するより一層の配慮と指導の工夫が必要である。また、リメディアルプログラムの充実も不可欠である。

5. 今後の課題と計画

2019 年度、旧教育推進総合センターと旧国際交流センターが統合し、新たに高等教育グローバルセンターが誕生した。新センターにおいて、英語教育の中心活動として、The ALL ROOMs, イングリッシュマラソン, リメディアル教育を掲げた。今後の課題で主要なものを二点述べたい。

一点目は、手さぐりで開始した新事業のリメディアル教育、学生の海外研修先を変更したイングリッシュマラソン、学生スタッフの大半が入れ替わる The ALL ROOMs, これらの役割と方向性を再度吟味して、有機的に結びつけていくことが今後の課題である。リメディアル英語教育は、大学の英語学習に必要な基礎力の習得を目標として行ったが、来年度以降、対象を広げるのか、扱う範囲をどうするか、等改めて検討する余地はある。二点目は、The ALL ROOMs とイングリッシュマラソンは、より密に連携をとり、The ALL ROOMs の学生スタッフがイングリッシュマラソンに関わる中で、双方の利益となるようなシステムを構築していくという点である。

6. おわりに

今後、高等教育グローバルセンターの英語教育の 3 本柱となる英語教育について、最後に述べたい。リメディアル教育は、学生にとっては、大事な機会として捉えてほしい。英語の習熟度は出身

高校や個人により差が大きく、「今更聞けないけど聞きたい部分」「英語は今は得意ではないけど得意になりたい」と思っている学生の手助けとなる重要なプログラムとして機能していくことを願っている。イングリッシュマラソン参加者は、目に見える TOEIC という成績だけでなく、シンガポールという、同じアジアで英語が公用語でありながら多文化が融合している国で、経験として得たものが多くあると感じている。その経験は、今後、何かの機会に必ず生かされると考える。The ALL ROOMs は、今年度 10 周年を迎え、初期の頃とは比較にならない程の安定した運営とにぎわいを見せている。この先の 10 年では、さらに変革をとげ、多様な国の学生が英語という共通語を通して知り合い、議論し、互いに学び合う場になることを切に願う。そして、The ALL ROOMs の学生スタッフには、高い英語力を磨くのは当然の事として捉え、人に尊敬されるような人間性・社会性も備えてほしいと常に願っている。

The ALL ROOMs・イングリッシュマラソンは、多くの人に支えられて「育って」きている。特に、ゼロから始まった The ALL ROOMs は、今や全国的にも学生が学生の英語習得を支援するモデルとして、先進的な位置づけにある。これらの活動を全面的に支援してくださっている本学学長と高等教育グローバルセンター長・様々な事務手続きを行ってくださっている事務の方々に、この場をお借りし、感謝の意を示したい。

引用・参考文献

- 濱田 陽 (2013) The ALL Rooms の現在と未来『秋田大学教養基礎教育研究年報』15, 11-19
- 濱田 陽 (2016) The ALL ROOMs による高大接続プロジェクト『秋田大学基礎教育研究年報』18, 13-17
- 濱田 陽・ベセット アラン・グラフィストロム ベン・タッカー ジェイソン (2018). 秋田大学イングリッシュマラソン『秋田大学基礎教育研究年報』, 20, 1-6
- Grafström, Ben. (2014). Fostering learner autonomy at Akita University: English Programs that Supplement Course Offerings. 『秋田大学教養基礎教育研究年報』16, 19-26
- Grafström, Ben (2015). Autonomy and Borderless Learning Strategies. *Akita English Studies*. 56, 36-44

Murphy, R. (2017). *Basic Grammar in Use Student's Book with Answers: Self-study Reference and Practice for Students of American English*. Cambridge University Press.